文部科学大臣　賞

二人の私

埼玉県　学校法人文理佐藤学園西武学園文理中学校　３年
北澤　夏紀（きたざわ　なつき）

私には，4 歳年上の姉がいる。生まれつき足が悪く，脳性麻痺という脳の障害を持っている。私は生まれてからずっと，車いすに座っている姉しか見たことがない。言葉もたどたどしく，精神年齢も，普通の人より進み方が遅い。けれど，明るく笑顔で，誰にでも優しい姉は，周りの人からとても愛されている。

でも，私は姉が嫌いだった。「障害者のくせに」「私より何もかも劣っているくせに」そんな事を思い始めたのは，小学校三年生の頃だった。学校に行っても，「〇〇ちゃんは見てるだけでいいからね。」といわれて勉強をまともにしていない姉。あたり前のように学校に行って，あたり前のように勉強をする私。でも母は，「お姉ちゃん，今日も学校行ってこれたの。偉いわね。」…悔しかった。毎日毎日学校に行って勉強している私は褒めないで，週に 1 回行くか行かないかの姉を，母はずっと褒めていた。どうして。どうして私の事は褒めてくれないの。どうしてお姉ちゃんより頑張っている私を褒めてくれないの。それをきっかけに，私の姉への嫌いな気持ちは募っていった。

ある日，家族で外食をすることになった。正直，私は外食が好きではなかった。姉が居ない時は楽しいけど，姉が居る時の周りからの視線が嫌いだった。チクチク，ズキズキと皮膚や心に突き刺さってくるような気がした。冷たく，とても差別的な視線だった。入店をして，席についておちついた頃，隣りのテーブルのカップルが不機嫌な顔をして，手を上げて店員さんを呼んでいた。店員さんを待っている時，こちらをチラチラ見てはコソコソ話をして，嫌な感じ。と思っていたが，店員さんが来てそのカップルがお願いした事が衝撃的すぎて，思わず口が開いてしまった。「隣りの車いすの人が急に暴れだしたら嫌なので，席を変えてもいいですか？」

信じられなかった。怒りがふつふつとわき上がり，頭に血がのぼった。幸い，カップル側の方の外側に座っていた私にしか聞こえなかったらしく，姉も母も父も楽しく会話を続けていた。けれど，私の頭は噴火寸前だった。第一姉は，暴れもしなければ騒ぎもしない。そんなお願いをいきなりされた店員さんもどうしていいか分からなかったらしく，「申し訳ありません。当店ただ今大変混んでおりまして，他のテーブルが空いていないんです。」といい，すぐに別の人のオーダーをとりに行った。すると諦めたのか，カップルはお店を出ていった。

食事をし終わり，会計をしている母と父をお店の外で待っていると，ぷーぷー

と可愛らしい音を鳴らしながら小さな女の子が歩いてきた。私と姉の周りを三周小走りした後，姉の車いすのスポークカバーをぺたぺた触って「かわいい」と笑顔で言った。嬉しかった。そういうと女の子は，どこかへ行ってしまった。

その後，私は家に帰ってじっくりと考えてみた。何故あんな酷い事を言う人がいるのだろう，と。でも，それと同時に思った。「自分はどうなのだろうか。」誰かが障害者の方に暴言や差別的な言葉を言っているのを見たら，酷い，と思うのに，そう思っている自分も，姉に酷い態度をとっている。他の人はダメで自分はいい。そんなのは間違っている。そして，入店した時に感じたあの冷たい視線。直接向けられた姉は，どう感じたのだろう。私は思いきって，姉に聞いてみた。「お姉ちゃん，お姉ちゃんはさ，いろんな人に見られたら，どう感じる？」いつも嫌な態度をとっている私にこんな事を聞かれて，姉は少しとまどっていた。しかし，姉はにこりと微笑んで，「確かにソワソワするけど，平気だよ。なっちゃんがずっとそばにいてくれるから。」すると，自然に私の目から涙がこぼれた。何故か分からなかったけど，大声で泣きたかった。

人はそれぞれ，違いがある。肌の黒い人，左利きの人，二重の人，障害も，人それぞれの違いだと，私は思う。けれど人は，その違いを嫌う生き物だ。自分と違う物を見つけると，関わりたくないと無意識に思ってしまう。でもよく考えてみよう。自分と同じ人なんてどこにもいない。自分はこの世で一人だけなのだ。そして，その無意識な差別のせいで，少しでも傷ついている人がいるという事を分かってほしい。「自分は差別なんかしていない」と思っている人も，もう一度ふり返ってほしい。

一人一人が，少し心の広さを大きくする事で，違う誰かが笑顔になる。あの小さな女の子の笑顔が，世界中で咲くことを願って。